

追憶

和歌山県 坂本 長兵衛

私は、父坂本六助、母カネエ夫婦の四男二女の長男として、大正十四年七月二十八日、和歌山県日高郡下山路村（現龍神村）で出生。

昭和十二年三月、甲斐ノ川尋常小学校卒業と同時に材木店の丁稚として奉公に出た。唐草模様小さな風呂敷包み一つ、中にメリヤス肌着の上下、タオル、さるまた、石鹼、紙袋に入ったライオン歯磨き、古い紙切れに飴玉を少し包み、母が「昼間は忙しくて食べられないだろうから、夜寝てから舐めよ」と入れてくれ「勤めは辛いが身体に気を付けて、呼ばれたらハイと返事せよ」と教えてくれた。父も「主人に喜んでもらえる人間になれ」と言った。

知人に連れられ材木店に行く。年配の人から若い人四人と、女の人もいた。「おねがいます」と挨拶し、

すぐ仕事にかかった。「分らないことがあれば、女の人（炊事、洗濯、掃除などしていた）に聞け」と一番年配の人が言った。それからは私のことを「ボンさん、ボンさん」と呼び、良いこと悪いこと何事にも「ボンさん」と呼ばれ、一日中走り使いで辛い毎日、家に帰りたい、今日は帰ろう、明日は逃げて帰ろうと、僅かな荷物をまとめた。しかし、ここに来る時、父母に言われたこと、となりのおばさんに少しだがと言って餞別をもらった恩もあるし、帰ることはできなかった。

少し油断していると「言われなくとも自分から進んでせよ」と叱られる。夕方になると風呂焚き、風呂が沸くと年配の人から入る。一人一人に湯かげんを聞いて履物を揃える。私の入る頃は夜も遅く湯も少なく、ぬるくなっていた。すぐ床に入り、風呂敷包みの中から飴玉を出して舐め、母のやさしさと恋しきで涙が流れる。「ボンさん」で明け、「ボンさん」で暮れ、夢のように一年が過ぎ、現場に出るようになった。

山に入り材積の計算など難しい仕事もやらねばなら

ず、私はソロバンなど計算はさっぱりできず、僅かに足し算が少しできるだけ。引算、かけ算、割算などはさっぱりできなかった。年配の人が教えてくれたが頭に入らず、とても苦痛で、色々と口実を作り教えてもらうことを拒否した。主人（社長）に「夜間の学校に行って勉強すればできるようになる」と言われたが応じず、二年余り勤めて辞めた。

今にして思うと、根性が足りなかったのか性に合わなかったのか、続けて勤めていたら私の人生も変わっていたかもしれないと後悔することもある。辞めて出る時「もつと長くいてくれると思ってた」と言っていて大きな熨斗の付いた袋をくれた。開けて見ると二百円入っていた。父が「過ぎた給金だ」と言ったのを覚えている。そして私の働いた材木店もなくなり、今はこの材木店のあったことさえ覚えていない者は僅かだと思う、すでに半世紀が過ぎてしまったのだから。そして勤めていた人の中にも戦死した人もあり、皆故人になった。

家で父母の手伝いをして過ごす間に、勉学に励ん

だ。

昭和十七年五月に徴用され、神戸製鋼所に入社。それから二年有余、昭和十九年五月、一年繰り上げ徴兵検査を受ける。場所は神戸市灘区六甲の高羽国民学校。検査の結果、第一乙種合格だった。検査終了後、受験者を集めて、「今年から第三乙種合格者まで現役兵として入隊せねばならん」と検査官が訓示した。それからは入隊通知を待っていた。九月に入ると通知が来て、十月十日に七〇連隊補充隊中部二十四部隊に入隊せよということで、郷里に帰り約十日余り休養し、当日、父と姉に送られて入隊。門の前で父の手を握った。今まで握ったことのない父の手、ゴツゴツした手だったが温かかった。入隊後第七中隊に配属され、冬の軍服、外套、先の丸くなった地下足袋などが支給された。一週間余りの滞在中に身体検査、注射などした。特に注射は痛く、熱の出る者もいた。

いよいよ出発し満州に向かう。夜が更けてから和歌山駅、現在の紀和駅から列車に乗る。夜明けに博多港に着、すでに船は接岸していた。女界灘も静かで船酔

いもなかった。釜山からも列車は止まることなく走った。窓の外も次第に初冬の景色に変わって行った。途中の駅で降りて体操する。食事も出た。豚肉、人参その他の野菜が入っていた。列車に暖房が入る。夜明けに東安省密山駅に着く。雪が少し降っていた。地面は硬く凍って厳しい寒さ。駅から徒歩で六三四部隊に入った。練兵場で各中隊に配属され、私達六〇余人は大隊本部富士隊に一班、二班に分かれて入隊。私は二班。先輩古兵の人達が衣服などすべて整えていた。しかし古兵の古着ばかり、内地から来て来た軍服はすぐ返納して、古い軍服に着替えた。教育係の伍長以下古兵はとて厳しかった。

一週間後だったか、広い練兵場で入隊式があり、七〇連隊の軍旗が出た。中央部分は弾丸に打ち抜かれすっぱりなくなっていて、歴戦を物語っていた。部隊長が軍人勅諭を読む。強い風が吹き寒い、足が冷たく知覚がなくなる、それでも部隊長は白い薄い手袋のみで勅諭を読んだ。軍旗も旗手がしっかり持っていて、強い風にも微動だにしない。大隊旗、中隊旗も強い

風でバタバタ音がして旗手の顔を叩いたが、旗手は瞬きもしなかった。「これが錬磨された軍人精神というものか」と緊張し、関節が動かなくなるように思った。

年が明け、軍隊生活にも少しなれて勤務に就くそのうちに、口号演習とかいって、私達の班からも選抜された人達が三人、四人と出て行った。

四月中旬になって、部隊は九州または沖繩に転属することになり、身体検査があり、新しい被服その他すべて整い、軍装検査も受け、出発はいつでもできる命令を待っていた。急に中止の命令で残留したのは同班で二人だった。四月末になって部隊は出発、兵舎前で戦友と手を握り合って別れを惜しんだ。部隊は正門を出て密山駅に向かった。残留者は手を振って送った。残留兵は二棟の兵舎に入る。間もなく、平陽八〇三部隊に転属、第五中隊に入隊。混成部隊で知人はなく、下級兵は私とあと二人、他の人は皆三年から五年の古兵で、気が抜けなかった。少しでも間違ひがあるものなら殴られ、いじめられ、必要以上に使役をさ

せられた。卜号演習とかで牡丹江八面通に古年次兵の主力が陣地構築に出て行きホッと一息したが、すぐ中隊の編成替えがあり、三中隊の五班で、下級兵は多くなった。この時や々と二ツ星になったが、「転々とすると進級が遅くなる」と班長が言った。

この班にも陰気な上等兵がいていつもイビリれたが、〇と言う下士勤の兵長がいて、温厚な人で何事にも下級兵の側になって面倒見てくれた。ある朝突然非常呼集がかかり、装具を付けて兵舎前に集合、「これから演習に出る」と中隊長が訓示したが行先は言わなかった。強行軍で倒れる者もあった。私も倒れたが気力で行軍した。着いた所は半截河陣地。兵員少なく衛兵司令が甲幹候補生（私と同年兵）、歩哨は下級兵だった。上官の目を盗んでは表に出ることもあった。毎週陣地へ食糧日用品等を輜重車に積み、馬に曳かせて週交替で運んだ。

ある朝の点呼で週番下士官に医務室当番兵を一人出せと言われ、班長が私を指名した。早速勤務に就く。軍医は大尉で、下士官の衛生兵を伴って陣地巡察で不

在が多く、医務室には衛生兵二人がいた。当時は現地召集の人（第二国民兵）も多く、体を悪くし入室して治療を受けていた。朝早く飛行機の爆音が聞こえた。表に出て空を見る、一機飛んでいる。衛生兵も出て来た。「東安の方に飛んで行くな」と言った。その時は、これがソ連の偵察機だとは知らなかった。その日

正午すぎ、満人の馭すターチョ二台が血だらけの日本兵六人を乗せ医務室に運んで来た。暑い日差しの中、長い時間ターチョに揺られて来たので、すっかり衰弱していて顔の色もなく、瀕死の重傷だった。軽傷と思われる人がはつきりした口調で「尚子屯陣地でソ連軍と銃撃戦が行われた」と言った。大量の血が乾いて軍服が肌にこびりついてどうすることもできないので、医務室の広い部屋に、入室患者から毛布一枚ずつ出してもらい部屋一面に敷き、負傷者を寝かせ、被服を脱がすにも水で湿さなければ脱げなかった。私も手伝ったが傷があまりにも大きく、体が震えて触ることができなかった。が、衛生兵は汗を流しながら世話をした。

午後になって中隊から伝令が来る。すぐ戻れとの命令だった。負傷した人や入室している患者に心残りがあったが急いで中隊に戻ると、班内はもう目茶苦茶だった。毎晩磨いた廊下も土足で歩き、酒も料理もたくさん出て、滅多に出ない肉料理などがあり、「何事か?」とK上等兵に問うと、敵しい口調で「出陣だ、早く被服庫に行つて着替えてこい」と言われ、行く和被服は散乱して足の踏み場もなかった。身に合った物を着けて中隊に戻ると実弾、手榴弾などが渡された。完全な武装をして陣地に移動。ソ連の飛行機が低空で飛んで来て、辺りかまわず撃ちまくった。皆草むらの中に隠れた。地面の土がはね上がった。

夕方陣地に着き、配置に就く。雨が降り出す。陣地には「以前は重火砲などあったが、沖繩の方に撤去していったのだ」と古兵達が言った。夜になって雨は止んだ。二人一組で動哨する。時々青とか赤の信号弾のような物が上がった。夜がとても長いと思つた。やつと夜が明けた。山の上は日の差すのも早い。朝食に乾パンをかじりながら警戒目標の方を見た。「あれは何

だ」自分の目を疑つた。ソ連軍の戦車が蟻の行列のように進攻して来る。後の方には赤十字の印の大型車両が続々侵入して来た。この機動部隊を小銃と戦陣訓だけで撃破することは不可能と思つた。陣地に迫撃砲弾が撃ち込まれた。

K上等兵が命令伝達に來た。「陣地で発砲するな。今夜、陣地を撤退し、八面通の本隊と合流するため牡丹江に向かう」と告げた。皆は撤退の準備をした。装具は雨に濡れて重い。薄暮になるのを待つて撤退を始めた。途中には大きな戦車壕が掘つてあつたが、ソ連軍の戦車には何の障害にもならず、進攻してきた。食糧の徴発や人員の掌握にも手間取らないようにと人員も二〇人以下の小さな班に分割し、夜行動し、昼間は黍畑とか草むらで休んだ。主要な道路はすべてソ連軍に占領されていて、昼夜は車両が往来するので道路は歩くことができず、迂回したり近道を行く。山を越え川を渡る。至る所に人、馬の死体が転がっていた。毎日見ていると何の感傷もなかったが、ヤチボーズの中に生後問もない男の赤ん坊が捨てられていた。「何と

かできなかったのか」むごいと思ったが「この場合は仕方がないのだ」と戦友達は言った。八月も中旬を過ぎていたか、遠くに満人の集落があり、大きな横看板のような物に大きな字で、満州去、中国立……読み方は分からなかった。そばに赤旗が立ててあった。この頃すでに日本は降服していたのか、「負けた」と思ったのは私一人ではなかったらう。

暑い日が続き草むらの中も蒸し暑く、早く日が落ちないかと日暮れが待ち遠しかった。薄暮になるとすぐ出発した。約一キロ程行った所で、「沼を渡ると近道ができる」と言う者がいた。地形から見るとなるほどと思った。班長以下古兵たちが相談して、沼を渡ることになった。人が通った形跡はなかった。沼は思ったよりも深く、腰まで没入し歩行に苦勞する。浅い所は水田のようで、稲が植えられていた。夜明前にやっと辿り着いた。小さな集落、そこは朝鮮人部落で、屯長のような人が出て来た。「兵隊さん心配はいらん、休んで行け」と言ってくれ、「腹が空いているだらう」と、土釜で米の飯を炊いてくれ、薪に稲藁を器用に燃

やした。白い米の飯など陣地撤退以来口にすることがなかった。おかずは辛い漬物だったが、今思えばキムチではなかったか、良く味わうことなく、かき込んだ。班長、古兵らが丁寧にお礼を言ってお、朝もやの中を牡丹江へ歩いた。

少人数の人達と合流し人も増した。一道河子、二道河子を過ぎて横道河子に來ると、大勢の日本兵が渋滞していた。川を渡らねばならないが、橋は破壊され簡単に渡ることはいできない。不意に銃声が出た。慌てて皆負っていた鉄兜を被る。近くにあって堆肥小舎のような所に隠れる。至る所から銃声が起こり忽ち銃撃戦となり、私も錆びた銃で応戦、銃身が熱くなった。急にソ連軍の射撃が止む。すると白旗を揚げた日本軍（参謀）が来て「戦争はすでに八月十五日無条件降伏した。速やかに武装解除せよ」と命じた。とたんに何者かに脳天を一撃されたように目がチカチカし、体の力が抜け、背負っている装具がとも重く、防毒マスクを付けているようで息苦しく、信じていたことが裏切られた腹立ちと口惜しさで体の震えが止まず、虚し

い思いがした。武装解除も武器ばかりでなく、時計、万年筆、貴金属など全て剝奪された。入隊時に拝領した銃剣にも未練があり、一抹の寂しさが消えなかった。悲しいことに陣地撤退の時から苦勞を共にした大田兵長が戦死したので、横道河子に手厚く埋葬した。武装解除で身軽になり、野宿で一夜を過ごして牡丹江に辿り着いた。ソ連軍の戦車、装甲車が地響きを立て横行していて、戦車にはハッチを開け自動小銃を構えた兵隊が見張っていて近づくことはできなかった。部隊で対戦車攻撃の訓練を受けたが、現実とあまりにも開きがあり過ぎると思った。

拉古收容所に入る。八面通に転属していた古兵達もすでに收容所に来ていて、本隊と合流し無事に着いたことを喜び合った。翌日からは食べることがすべてだった。朝は馬糧で作ったのかと思われる黒パン。酔っぱい味がする、とてもうまいと言える物ではない。餌と言った方が納得できる。空腹を満たすには、味はどうでも良かった。Kと言う上等兵がいて食べ物の世話をした。料理も上手だった。私達は野菜などの徴発に

行く。ソ連の兵隊が三、四人付いて出かけ、野菜のある所に来ると散らばって、野菜その他手当たり次第取り集め雑のうに詰め込んだ。早くしないと満人が撃つて来る。流れ弾に当たって亡くなった人もいた。欠かせないのが新で、大勢の人なのでなかなか簡単に手に入らなかった。電柱を倒したり鉄道の枕木を抜く。どんな不法なことをしても罰せられることはなかった。被害も多く、満人がソ連兵を連れて收容所内に入り、日本人の持っている物、真新しい物、欲しい物がある。ソ連兵に言いつけ略奪させる。洩ると自動小銃を胸に突き付けて「ダワイ、ダワイ」と言う。口惜しいが捕らわれの身、屈辱に耐えねばならない。收容所内は盗難が多く、私達は靴をはいたまま寝た。脱いで置くとすぐ盗られる。これを満人に売る者がある、注意せよと班長から指示がいつもあった。入隊して以来、僅かな小遣いを班長に預けていた。それを終戦で返してくれた。二百五十円余りだと記憶している。收容所周辺に満人、朝鮮人が物売りに来て、米の握り飯が漬物付けて一つ十円だった。大勢の人でなかなか買えな

った。また売る方も、万一に備えて少量しか持つて来なかった。

十月に入り、大豆の葉も色付いて来る。暖かい日だった。風呂に行くと言ってソ連兵に引率されてたくさん軍用車両が駐車している所に行く。見たことのない大型車両がたくさんあり、中に大きな幕舎があり、その中に入る。衣服を脱ぎ、裏返しにして大型車両の中に吊り下げる。風がたくさん寄生してコボレ落ちた。お湯が出てシャワーを浴びる。湯が体にかかる。風の食った所がとてもしゃわりの湯の量が少ないので洗うことも温まることもできない。ただ体を濡らすと言った方がよい。それでも一時風がいなくなり、さっぱりした感じがした。

それから間もなく「東京ダモイ」とソ連兵が言うようになり、専らダモイの話ばかり。中には住所録を交換する人達もいて皆が浮き浮きした気持ちになっていた。朝夕は肌寒く、冬の外套一枚被って寝るのは寒い。かますを上に着せる。いよいよダモイの日が来た。貨車の中は二段の棚になっていて、下の者は立ち

上がる事ができなかった。汚れた貨車で、家畜同様の扱い。この貨車も満州からの根こそぎ強奪に使用したのかと思うと、叩き壊してやりたい怨念がこみ上げた。

列車はのろのろと走り、牡丹江を出てから二日ばかりして、上段の者が「おい、貨車は北の方向に走ってるぞー」、悲鳴のような声だった。北斗星の見える方だ。小さな窓の隙間から見たのさだろう、とたんに雑談は止んだ。二、三人が代わる代わるに隙間から夜の空を覗く。「ソ連に連れて行かれる」、打ち消すように「迂回しているのさだろう」と言う者、泣き出す人もいた。誰も話す者がなく、収容所から持って来た煮干をたくさん入れた高粱雑炊を食べた。それから三日間も黙り込んで会話もなく、外は雪が積もっている。夕方近く貨車が停まり、外から戸が開けられた。肌突き刺す寒さ、被服はすべて夏物、二〇センチ以上の積雪、足が冷たく知覚がなくなる。途中で分割され、知人も別れた。

辿り着いた収容所にはすでに千島から来た人達が入

って作業していた。食堂のような所に入り、小さな粉団子のような物と塩汁、冷えた体も少し落ち着いた。

「ここは第二収容所だ」と、先に入っている人達が言った。建物はログハウスのような造りで、部屋の隙間に苔やボロボ布が詰め込んである。両側に棚があり、中央は道路、中ほどにドラム缶を横にしたストーブがあり、マットも毛布もない粗末なものだ。板張りの上に外套を敷き、雑のうを枕に寝る。ストーブが消えると寒くて眠ることはできなかった。

作業は鉄道建設であった。鉄棒とスコップを使って直径三〇センチ、深さ五〇センチの穴を三カ所掘る。これが一日のノルマ。地面は一メートルから二メートル凍結し、鉄棒を力いっぱい打ち込んでほね返る。三カ所はおろか、一カ所掘るのがやっと、寒さと空腹で鉄棒を支えるのが精いっぱい。できた穴に火薬を入れる。線路を貨車が通るので、合間に爆破する。一回爆破すると畳一帖程の土の塊が至る所に滑り落ちる。この土石を細かくし、ターチカと言う一輪車で線路の外に運ぶ。途中に監督やソ連兵が見張っていて、運ぶ

土石の量が少ないと足でターチカを蹴り倒された。いっぱい入れると支えて歩くことができない。しかしノルマを消化せねば作業は終わらない。日が暮れるまでやらされる。作業が終わって宿舎に戻っても誰も話す者はいない。それでも下級の者はストーブの薪集め、夕食の支度などで休むことはできず、夕食が済むと靴を乾燥場に持って行かねばならない。フェルトで作った長靴は雪で濡れ、五人分も持つと重い。少しでも遅くなると乾燥場の人に小言を言われ、殴られることもあった。飲料水も昼間の湧き水を利用していたが、凍結し何も洗うことができなくなった。二カ月も風呂に入らず虱が繁殖し、痒くて気が狂いそうになる。たまらんで肌着を脱いでストーブの上で焙る。虱がストーブの上に落ち、パチパチと音がしてはじめて嫌な臭いがした。

年明け早々だったと思う、夜、突然移動することになった。一斗缶程の小さなストーブを貨車に持ち込む。ソ連兵が尻を後ろから蹴った。これ以後はここで住むことはできなかったのではないか。僅かな薪で寒

さを凌ぐ。走っている時間より止まっている方が長い。三日走って貨車から降ろされた。広い所だと思つたら凍結した川の入江、強い吹雪で、後ろ向きでないと歩けなかった。凍傷になる人もいた。凍死寸前、辿り着く。この建物もログハウス、古くて傾き、太い材木で支えている建物もあった。門の入口に13……とロシア文字で書いてあった。多分十三収容所だろうと思つた。十キロ程の道のりだと思つたが、吹雪で時間がかかった。

翌日から作業、朝五時になると鐘が鳴る。鐘と言ってもH鋼のような鉄の板、これをソ連兵がハンマーで叩く。耳にささる音がして皆、地獄の鐘と言つていた。作業に出るのに門の入口に並ぶ、五列でないと勘定ができない。羽子板のような板に人員を記入する。作業も色々あったが、私は伐採。三人一組、鋸は二人で使う。私は幸い北海道出身の下士官で伐採の経験のある人達と作業し、色々教えてもらい、ノルマも果たした。カマンジールからハラシヨウラポーターと褒められる。激しい労働なので事故者も出た。骨折や倒木

の下敷きなど、防寒具を着けているので視界も悪く動作も鈍い。飢えと寒さ、心身共に限界に達し、予期しない事故に遭つて命を落とす人もおつた。

凍土シベリアにも五月半ば過ぎになると、高く積もつていた雪も少しずつ消えてゆき、春の訪れが目で見られるようになった。近くポロシヨイドクターが来るので部屋をきれいにせよと収容所長から言われ、大掃除する。風呂にも行き、汚れた被服を脱ぎ虱の駆除、体を洗うことはできないが久しぶりに湯で体を拭いた。虱も少なくなり夜も良く眠れた。間もなくポロシヨイドクターが来た。女医だった。身体検査も簡単なもので、尻の皮をちよつと引つ張るだけで終わった。

すぐ移動があり、十七収容所に入る。病院のようにきれいだ。入所すると、着ている物はすべて脱ぎ、肌着だけで部屋に入る。マットも毛布も電灯もあり、部屋には四十人くらい入つていたと思う。ペーチカを焚くのも食べ物の世話もみんなソ連人で、親切にしてくれた。暫くして人手が足りず、自分達でペーチカ焚き、掃除、食物の世話をすることになり、クジ引きで

四人を決めた（盛りつけて余った物は四人で食べられる）。私達はベッドの上でごろごろしていれば良かった。悩まされた虱もいなくなり快適な毎日。退屈なので花札を作ったり、将棋の駒を作ったりして過ごした。

七月末頃か、再び身体検査があり、作業に出る私達は元の十三収容所に戻った。冬伐採した木材の搬出。現地にも小舎を作り、そこに泊まる。入江の近くに炊事も作る。一人が専従し、ソバ粉のこねた物、以前よりも量が多くなった。馬を使って材木を引き出す。ノルマも厳しく言わなくなり、気が楽になった。運び出した材木はすぐ筏に組む。カマンジールは筏の方に行っており、山の方は静か。馬にも軽い荷を引かせてねぎらってやる。穀類は一日一回、腹が空くのか、太い材木を引く息は荒くなり、鼻をブルブル鳴らした。疲れているのか、軽く首の所を叩いてやった。山から材木を引き出す者と馭者には靴も良い物が支給され、泥の入ることはなかったが、材木を車（冬はソリ）に載せたり道を造る（切株を低くしたり雑木を切り開く）

人には満足な物はなく、揃ったサイズの靴も少なかった。筏を作る人も、終日素足で川に入り、脇から下は水で濡れて作業していた。

ちょうど昼の休み時間に収容所から連絡が来て、移動すると言って名前を発表した。私もその中に入っていた。私は木材の搬出を続けたいと思ったが、そんな個人の自由など認めてくれるはずはない。さて出て行くこと決まると冷たい。支給されていた新しい靴も古い破れた物と取り替えられた。船着き場には大きな木造船が来ていた。甲板が広くて木材、流木などを積む船で、船底は浅く何も積むことはできない。移動する者は四十人か五十人くらいはいたかと思うが、良く分からないが甲板の上に大勢いた。甲板に座って待つ。日が次第に落ちて行く。カーチルと言ってエンジンの着いた船が来て引く張る。川（入江）を下る方向に進んで、十三収容所とも別れた。夕暮に目的地に着く。上陸し暫く歩いた。付き添って来たソ連兵が「今夜はここで野宿だ（スパーチ）」と言った。皆が怒った。「無責任な奴だ」とソ連兵を日本語で罵った。出る時に持

つて来た汚れた毛布を被って夜露を凌ぐ。食べる物は
何もない。夜が明け、再び歩き始める。小さな住宅が
たくさんあり、今までと少し変わっている。行き会う
人も多い。賑やかな所に一〇七收容所があった。すで
に入所している人達がいる、その中の一人が演説口調
で收容所内の決めごとなど長々と説明した。建物も部
屋もきれいで設備も良く、電灯もあり、風呂、洗濯
場、床屋、乾燥場、靴の修理もできた。日本人の入浴
日は日曜日で、一度に大勢入ることはできないので二
週間に一度で、湯も多く、蒸し風呂もあり温まること
ができた。肌着も入浴時に替えてくれるので虱がいな
くなり、何かを忘れていた気持ちもなくなった。旧軍隊の階
級もなくなり下級兵も使役はなく、殴られることも敬
語の必要もなかった。

明けて二十三年、民主化運動が盛んになり、古来か
らの日本共産党やマルクス、レーニンなどといった人
の業績を聞いた。夜は批判会とか反省会といった集い
があり、日和見分子とか反動分子など、オルグが延々
長舌の解説をした。壁新聞や投書箱もできて食堂の

壁に貼り出した。特に投書の内容は中傷しこき下ろす
ものもあり、建設的な意見の投書は少なく、筆跡を隠
すような書き方もあった。また文化部も発足し、器用
な人がいて箒の柄で尺八を作り、歌や民謡などを聞か
せた。月一回くらいか演劇を見せた。共産主義を讃え
るものが多かった。日曜日には空地やベンチに土をこ
ねて像を作り、鎌とハンマーを持たせてこれをみんな
で批評した。收容所内でも作業の編成替えがあり、夜
間作業に出ている人が日本側の所長になり、ソ連のナ
チャニックも大変気に入っていた。私も色々な作業に
出たが、辛い作業、息抜きのできる作業、水運搬、薪
切り、防火水桶の据え付け、ボイラー焚きなどをし
た。

日当たりの良い所の雪がシャーベットのようになっ
た。日も長くなり、バダオースに行く。青年行動隊と
か民主突撃隊など色々な名前を付け、二列に並び先頭
の者が赤旗を持ち、歌を歌いながら行き帰りをした。歌
詞も少し覚えている。「若い同志は兄弟だ、ガッチリ
固く腕を組み……」、ソ連の兵隊も歌詞を覚え、歌を

催促した。バダオースがどんな意味か知らなかった。

が聞いてみようとも思わなかった。私達T.N班は赤旗を先頭に現場に着くと、引込線に五十トン貨車が二両から三両入って、主に穀物で燕麦、小麦、豆類、特に麦類は、貨車の扉の所に三十センチ角の窓があり、そこに袋をかけ窓を少し開けると中から穀物が出て数秒で袋一杯になり、倉庫に担ぎ入れ、秤台に載せ五トン、十トンと量り、記帳し、倉庫の一角に積んだ。大勢で担ぐので一袋（二〇キロくらい）を隠してもカマンジールには分からない。見えない所に隠して置き、暫くしてクリューカ（休憩所）に持ち込んで煮て皆で食べる。休憩所には煮炊きする設備ができていて、カマンジールが見ても何も言わず、おおっぴらにできた。激しい重労働だが、空腹は感じなかった。収容所でも食べ物の量が僅かながら多くなり、作業に行ってもノルマとかダワイダワイと追い立てる声が少し遠ざかった。

日曜日の門の出入りも自由にできて、ソ連兵の守衛に行き先を言うておくだけで良かった。釣りに行く

者、大工の心得のある人は住宅修理に雇われて行くし、桶屋、左官、電気、その他本職の人、自称の人、色々いた。そんな時、突然ダモイが実現した。帰ることなど半ば諦めていたときだけに、闇の中に小さな光が見え、いつかは私も帰れると望みが出た。そして十数人が収容所を去って行く。「赤旗の歌」を歌って送った。

民主化運動も激しくなり、「反動的な言動をするとダモイが遅れる」と噂が流れた。私は消極的だったので親友のTと「要領良くしよう」と話していた。マルクス哲学・経済とか弁証法などと難しいことを聞いても小卒の頭では理解できず、しようとな努力もせず、気持ちもゆとりがなく、人権も自由もなく、今日一日を命があり無事に過ぎて良かったと思ひ、バダオースの重労働に耐えていた。変化のない日が過ぎ六月半ば、暖かさから暑さに変わる頃だった。収容所から作業している所に連絡が来た。ダモイだ。T.Nの班から六人で、その中に私の名もあった。飛び上がるうれしさだったが、友人達のことを思うと表に出せず、刑人が釈

放されるってこんな気持ちだろうと想像した。

急いで収容所に戻る。帰国する人を集め民主化運動の指導者（オルグ）が演説し、「帰国した後、民主運動をしてくれ」と手を握った。早速装具を持って少し離れた一〇二収容所に集結。ホルモリン地区の帰国者が集まるので大勢の人だ。小隊を編成し、翌日から貨車の棚作り、スターリンの写真を飾り付け、共産主義を讃える標語、その他花など飾り、いよいよ帰国する日が来て貨車に乗る。広くてゆったりでき、面識のない人達とも会話は弾んだ。ポーと汽笛が鳴り、貨車がガタガタと音を出して動き引込線から出て行く、「ワアー」と歓声が上がった。ソ連の人達も手を振ってくれた。次第にスピードを増しホルモリン地区とも別れた。

一夜明け、気持ち焦った。貨車がとて鈍速だ。停車中も苛々した。乗車して三日目、「マットの中の藁を捨てよ」と言われ、走る貨車から放り出す。暫くすると、ナホトカに着く。海が見える。日本まで続いていると思うと駆け出したい気持ちになった。ナホト

カでは厳しい労働はなかった。大勢で歩く時は共産主義を讃える歌を歌って足を揃え、一糸乱れぬ行動で、受けた教育の成果をソ連に見せるためだろうが何の苦にもならなかった。ここまで来たのだ、あと一息我慢すれば良い、反動分子でも日和見分子でも良い、猫を被ってりゃ良いのだ、抑留以来いかなる屈辱にも耐えて来たのだ。

やっと待ちに待った船に乗る時が来た。大勢の人が並んで待つ「ダモイ」だ、本当の「ダモイ」だ、足が震え唇が乾いた。大きなノートを持ったソ連の将校が一人一人名前を読んで確認し、船に乗り込む。信洋丸と書いてあった。私達は船倉の一番下だった。早速汚れた上衣を脱ぎ、洗濯板のようになった胸を大きく広げて深呼吸し、ソ連の空気も匂いも吐き捨てた。間もなく汽笛が鳴って、船は動き出した。もう大丈夫だ、自由になった。みんなはしゃいだ。船のエンジンの音も気持ち良く聞こえた。収容所内での演説では「抑留者の帰国を日本政府が遅らせている」と言っていたが、日の丸の国旗を掲げた船の通るのが甲板から見え

た。「ナホトカに抑留者を迎えに行く船だ」と船員が説明した。

一夜明けた午後だったか、甲板から大きな声で「日本が見える」、その声に皆甲板に上がる。一番下の船倉から駆け上がるのになぜか息切れはしなかった。水平線に雲か島が見えた。胸がどきどきした。やがて舞鶴港に入った。皆甲板に上がった。船が止まると、腕章を付けた人が来て背中に白い粉を入れた。夕方で上陸できず、船は再び沖に出た。船で一泊。夜が長い。

眠ることができなかった。翌朝入港し、待ち遠しかった上陸が始まった。栈橋から上陸、元気が出た。検疫を受け、入浴、新しい下着も支給され、頭から足の先まで新しい。皆さんがとても親切にしてくださいました。

二泊して帰る朝、福井県方面に帰られる人は事務室まで来るようにと達しがあり、福井県では大きな震災があったと、新聞にニュースと傾いた百貨店の写真が出ていた。私は親友に別れを告げ郷里に向かった。当時は紀勢線と言った。稲原駅で下車、三十キロの道を徒歩で帰る。バスもタクシーもなかった。しかし何の

苦痛も心配もなかった。暑い日差しが照りつけた。途中で田の畦を刈っていた中年の女の人が私を見て、復員者とすぐ分かり「長い間ご苦労だった」とねぎらってくれたが、「うちの息子も未だ消息が不明なのだが、○○と言う者に会わなかったか」と、涙を流しながら尋ねられた。「何千人と言う人の中には同じ名前の人もなくさんおり、分からなかったが、必ず元気で帰って来る、気長に待っていて」と言うと、女の人が泣くので早くこの場を去りたかった。

夏の日差しが照りつける。少し行くと、用水路の水が道路に溢れていた。きれいな水で、人の往来もない。汗の滲んだ衣服を脱ぎ用水路の水を浴びる。その時自転車に乗った人が通りがかり、慌てて水路から出た。復員者とすぐわかり、自転車の人が「長い間ご苦労様だった」と言ってねぎらってくれ、行き先など尋ねられた。私の住所も知っていて、「まだ七キロはある。私の家で休んで行け」と言って荷物を自転車の荷台に載せてくれた。歩きながら、抑留中のことなど話している間にその家の近くまで来ていた。早く帰りたい

いので辞退したが、執拗に腕を擱んで引張る。水浴びしたことを後悔した。仕方なく家に行った。西瓜をたくさん出された。喉が渴いていたので無作法にかぶりついた。とても甘い味だった。暫く雑談していると大きな雷が鳴り凄く夕立が来た。雨は止まず早く帰りたい、いても立ってもいられず帰ろうとしたが、「雨は止まん。日が暮れると夜道は危険だ。泊まって行け」と引き止める。私も断りきれず「ここまで来たのだ、一日遅くなくても良いでないか」と自分に言い聞かせ、言葉に甘えた。鉄の釜風呂に先に入れてもらい、夕食には白い米の飯が櫃に入れて出された。この方の話だと、戦後の食糧事情は悪く米は貴重だと話してくれた。夜は「疲れているだろう」と早く床を敷いてくれ、蚊帳も吊ってくれ、とても懐かしく郷愁を掻き立てた。朝は早く目が覚めた。このうちの方も朝は早く、「良い天気だ、ゆっくり休んで帰れ」と言ってくれたが、心の中は駆け足で郷里に向かっていた。朝食の味噌汁も昔を思い出す味であった。お礼を言って辞めたのが八時を過ぎていた。

あと七キロの道を急ぎ足、家の見える所に来た。立ち止まって心ゆくまで景色を眺めた。十七年徴用令で行く時も、十九年に入隊した時も、今も何一つ変わった物はなかった。入隊する時「お守りに」と母がなた豆を小さな袋に入れ「なた豆は必ず元に戻る」と言って持たせてくれた、そのなた豆はなくしたが、無事に生まれた所に戻って来た。小さな軒の低い煤けた家だが、生まれ育った所、感無量だった。両親も健在、母が泣いて喜んでくれた。近所の人達も「長い間ご苦労だった」とねぎらってくれた。生き残った敗残兵を温かく迎えていただき、ありがとうございます。二十三年七月半は前でした。「二十三年末まで休養せよ」と父母が言うので、毎日何もせず一日中寝てばかりいた。良く寝るので母が案じた。母の話だと「復員して暫くすると突然亡くなる者がある」と言った。至る所から葉書が来た。丁寧に返事を書き、また遠くから訪ねて来る人もあり、私の知っている限りのことを話した。

明けて昭和二十四年になり、何か働く所がないかと

探した。当時は働く所がなく、大勢の若者が失業し簡単に仕事は見つからなかった。ある時叔父（母の実弟）の家に行くと「仕事を手伝ってくれ」と言われた。その頃叔父は木材の売買をやっていて、「伐採をやってみないか」と言われた。シベリアで経験があるので、叔父から道具を借りて山に入った。小舎に泊まることもできた。しかしシベリアとは条件がすっかり違った。山は急傾斜で、木の株の根を切り取り、倒れるまで手間がかかった。皮も剝がねばならず、考えていたこととは大違이었다が、馴れて来ると面白い。賃金をくれる、欲が出る。こうして昭和二十六年に結婚した。三人の男の子ができ、昭和四十年まで山林労働者として山で働き、その後は木材の流通市場で働き、昭和六十年定年退職。三人の子供も今は独立して、孫もできた。今は妻と二人、楽しい日々を送っている。

平和を希い、凍土に眠る戦友のご冥福を願い、慰霊の祈りを捧げる次第です。

【執筆者の紹介】

大正十四年七月二十八日出生

昭和十二年三月二十三日

下山路村立甲斐ノ川尋常小学校卒

業

同年五月〜十四年八月（二年三ヵ月）

材木商店へ丁稚奉公 算盤不得手

で辞職

昭和十七年五月

徴用令により神戸製鋼所東海工場

第十機械課入社

昭和十九年五月

徴兵検査（一年繰上げ） 灘区高

羽国民学校で受験 第一乙種合格

十月十日

笹山第七〇連隊補充隊（中部二十

四部隊入隊）

十一月

満州第六三四部隊大隊本部（密山

県）転属

昭和二十年四月

平陽第八〇三部隊に転属 一等兵

に昇進

六月

半截河陣地に移る

八月 ソ連軍侵攻で陣地撤退・転進

九月 横道河子で武装解除 牡丹江拉古

收容所入り

十月 シベリアへ連行さる 第二收容所

で鉄道建設隊

昭和二十一年一月 第十三收容所に移る 伐採隊

昭和二十二年五月 第十七收容所休息の家入り

七月 第十三收容所に戻り運搬班

十月 第一〇七收容所に移動し各種作業

体験 民主化運動

昭和二十三年六月二十九日

舞鶴上陸 復員し帰郷

昭和二十四年〜四十年

山林労務伐採従事

昭和二十六年 結婚（三男児を授かる）

昭和四十年〜六十年

木材市場で就労

現在は退職年金生活に入っているが、三人の息子が

それぞれ独立し、教師の道を歩んでいる者もあるため、父親がどう闘って生きたか、平和への教材として残したいと記憶を辿って記述された。

（和歌山県 林 三子雄）

シベリア抑留前後の記

鳥取県 森 田 東 明

武装解除

昭和二十年六月上旬「き号演習」と称して、東満国境小興安嶺一带に遊撃拠点構築のため、機動旅団は出動した。その頃、ソ連との開戦を意識していたのか、それとも極秘の行動であったのか、階級章を外し、将校も普通の兵の服装で臨んだ。遠く人里を離れ、大自然そのものの密林の中に、一個小隊ぐらいが入れる穴を掘り、天井を樹の枝葉で擬装し、そこが起居する拠点であった。七月中は毎日、拠点作業や戦車壕を掘り続け、炎暑の中を過ごした。松花江の凍結時期、ソ連